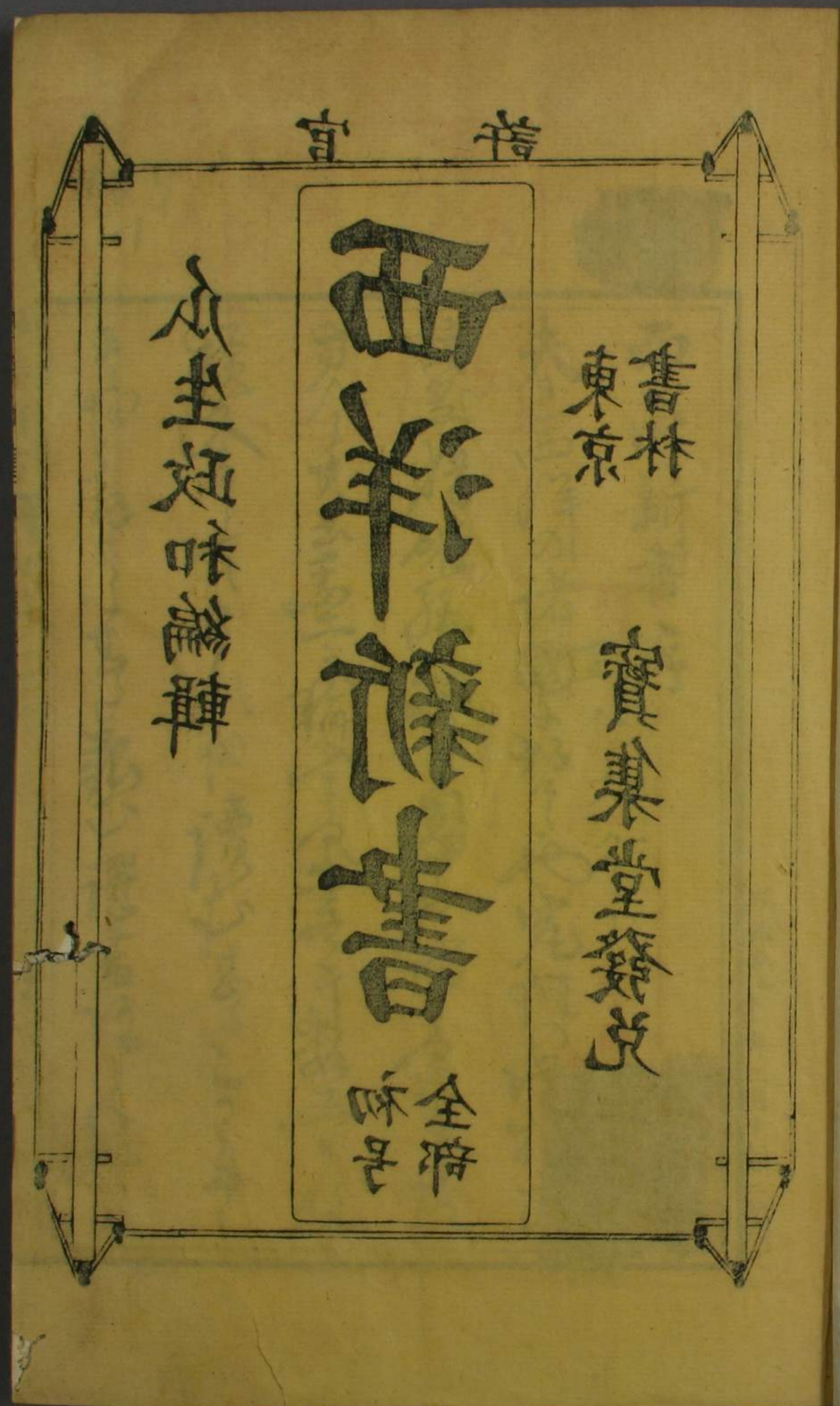
KODAK Color Control Patches © The Tiffen Company, 2000
Kodak LICENSED PRODUCT
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

166

JL 2
165
1


發行
書林
東京
寶集堂發兌
西洋藥書
全附味見
永生延命藥

官許

瓜生政和編輯

西洋新書

初号
全部

東京
書林

寶集堂發兌

東京學校

明治十三年八月十六日クリヤ氏寄贈

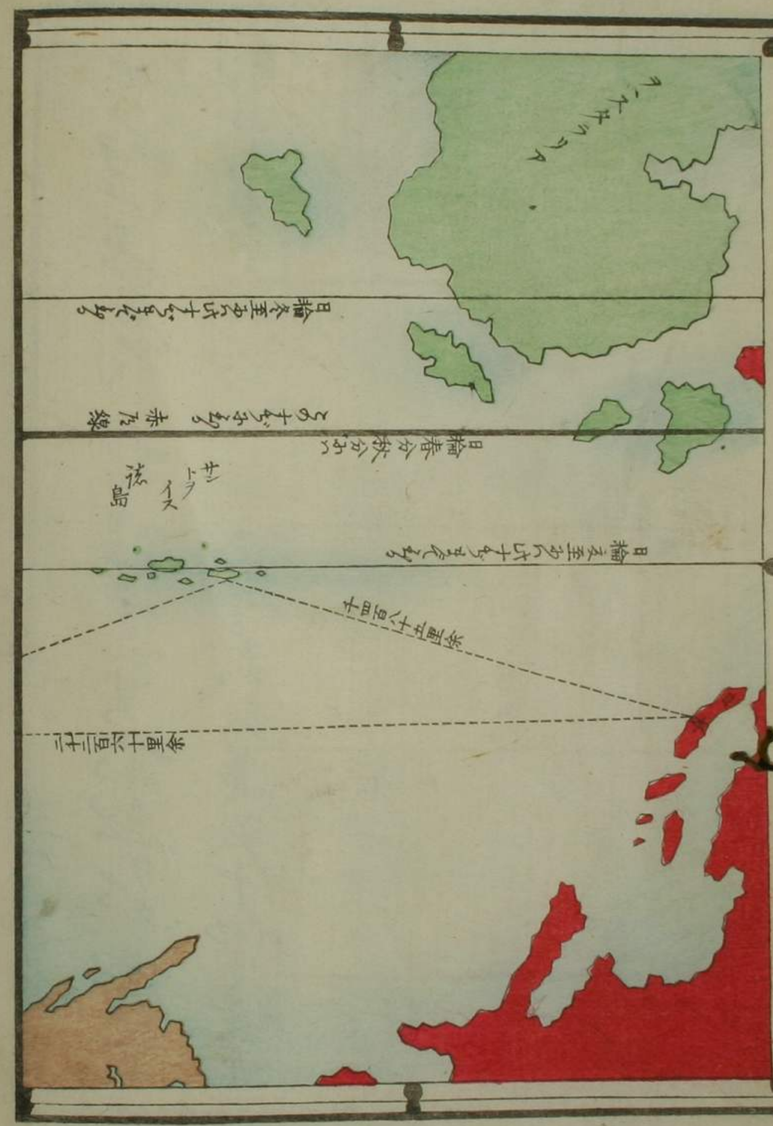
西洋新書序

夫れ西洋の諸國より始めて究理の学校を諸邑に特確後憲より国に徧ねく及ぶまで史人貢を輸し物を象り数を稽へ以て模文を作り小物を賣り遠書を編し

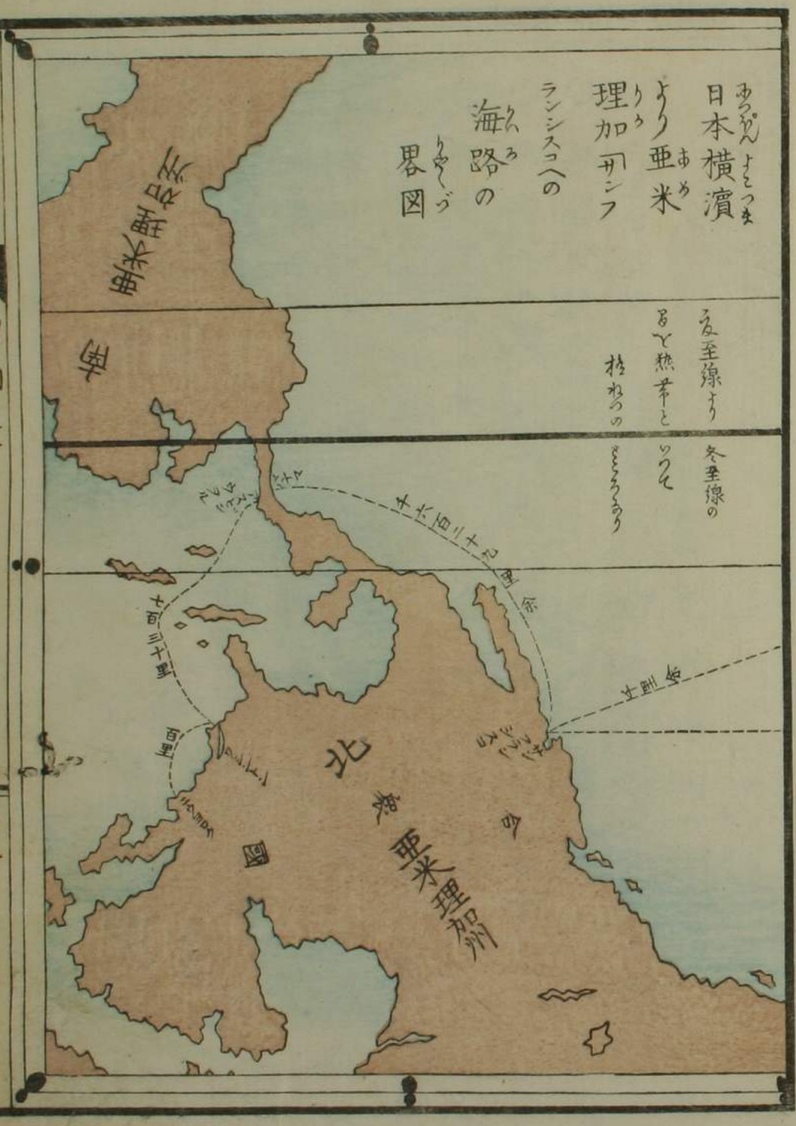
明治五壬申年三月十七日二冊求之

儘多の潛語四まつ〳〵西まつ〳〵年
月をへ候あひだ〳〵屋敷傷み
鄙語伊言四〳〵洋出中所用の地変
を物出〳〵西洋新書名目書を通ず
来候ものの新〳〵の深間の婦女
僻邪を去るべしと是也用ゆ

世界は物四海に隔てゝ本邦を知る
事なきを世情うとく屋敷を住居を壊す
事国土を知るべき神益なしとゝ
辛未陽月



日本横濱より亞米利加サンフランシスコへの海路の畧図



目録

○太平海の説
○蒸気船の説
○三維斯湊并気候の説
○地震の説
○高山噴火山の説
○三維斯開闢の説
○同市中風俗の説
○同産物の説
○越歴篤兒の説
○三維斯雑話并人員の説
○
○来方西斯哥地形気候の説
○仏蘭克林の傳
○巴那麻市中風俗の説
○汐の満干の説
○蒸気車の説
○同鉄道の説
○ヂョンジ。ステフェンソンの傳
○傳信機の説
○海中深浅の説
○阿龍の傳
○亜米理加召開闢の説
○避雷杜の説
○巴那麻の山道

○同開闢の説
合衆国墨西哥戦争の説
○蒸気機関の説
「ゼエムス、ワットの傳」
○来方西斯哥市中風俗の説
○同鑛山の説
○同旅亭の説
○同雑説
○同産物の説
○
○巴那麻湊地形気候の説
○雷電の説
○初集　通計四十三條
○并アスビンウヲル湊の説
○
○華盛頓府地形気候の説
○同旅亭の説
○同市中風俗の説
○瓦斯燈の説
○世界人種の説
○同図
○華盛頓府風俗衣服の説
○世界宗旨の説

凡例

一　書中千何百何十何年と云るは西洋の紀元ようゐして何年おとるゝは明治四辛未年よりなり

一　尺度は日本の曲尺を用ひ里法を凡三十六丁一里と用ひ

一　度路の里数法は區ゐ一板あるごとに何里と先ず記し

　　次へば故ゐその中数を採りて記し

一　貨幣は弗の相場の上り下りゐ依りて一定なし雖も紛毫

　　婦女子ゐ解し安からんが為ゐ日本の金ゐ直して何文何分と記し

一　書桃太郎の鬼が島朝比奈の巡りの草双紙ゐ換て幼毫婦女

　　子の看ゐ供へんと為る物なるべし誤脱最多くる可

　　諸君子ちからく拙著の責を免さば後日識者ゐ因に詳ゐ訂正

　　を加へん而已

西洋新書初編巻之上

東京　丘生政和編

三維斯オハホ島の説

嘉永六癸丑年六月今を去ること十八年お相摸國浦賀港へ北亜米理加合衆國の水将ペリー彼理なる者彼の國大棟梁の使節として来船せしより以来　皇國と異國との交際漸ゐ開け既ゐ爰應二甲寅年ゐ至りて是まで停止なりし　皇國人も外ゐ出る物多くゐ出ることゐ成り近来諸人の中にも五大洲のことを知ること来りしの間なるべし是を羨む人もあ

かゝ様ど旅中の入費ゐ差支え或ハ農商の活業ゐ隔てらるゝ万
里の波路を紙しらて異國へ往るハ丈夫十〻容易るゝ謂んや老
人婦女子をも故ゐ今彼のゐゝと目おゐて来一人の話説を史さ人
ゆるゝ遠ゐ海地ゐ渡む小童のお伽話ーゐと渡来最初のゐる
まゞ亜米理加合衆ゐを初めとし傍ら順路の港〻ゑ記ーつゝ
歐羅巴法ゐの模様を何くもとる撰あつめ毫の隙ゐ〻〻解話
出さんしゝ先亜米理加往くゐハ東のゝ太平海を渡るゝ
この海ハ世界第一の大洋るゝどもをゝろ太平海を往来ゝる
合衆ゐの飛御船出来ーゐより模倣より合点ゐ「カリホルニヤ
ゐの「サンフランシスコ」と云ふ港まゞ八日数九四五日ゐど扨まゞ往

まゝなりあの里数二千二百六十里程ゐ〻芙走る船路るゝ
飛御船ハ何ゐのゐゐても蒸気船の汽使ると用ひ船御の早〻ん
事を欲まゝるゝ
○蒸気船ハ亜米理加合衆國の人の発明ゐ〻今より九十年ゐど
前のゝろより工夫を初めゝども度と仕損じん全き物ゐ出来
ゞ然るゐ六十五年ゐどゐゐ合衆國の都府る「ニウ
ヨルクの地の「フルトン」と云人百二十馬力の蒸気船と造りゝ
ーゐ始めて金波ゐ乗ーゝ先試ゐ乗出しんゝるゐ十
ゐ時ゐのゐゐ百二十里の浪路を走りしゝるゝ是刈蒸気船
の濫觴ゐーて夫より追〻世の中ゐ弘まゝるゝども最初を河

船はまづ内海の波しぶきを用ひてうしがを使ふ術
開化して遂ふ軍艦高船或ひは飛御船等とあれど蒙ふ万
里の大洋をも容易ふ往来するの役をなしたり蒸気船と
船と波荒中と三つふ分ち舶と艫と巻物の垂場とを其中ふ
蒸気の機関を据え船の両旋ふ車と附機関の中ふて石炭
を焚湯を沸しその湯気の力ふて両ときの車を搏回して船を
進むるなりとぞ然両輪の蒸気船ふ云ふ然をども両ふん
船ハ風波の摸拓ふよりて船の傾くときふ一方の車水を離
れて船御ちるをもて六ツ方くるるすると雖以て立ち丈を回らし
遂ふ揖ふて楫と舶とのるふて羽根を輪回し両輪の代りと

「フルトン蒸気船を発明して雛形を造るの図」

為せり是を螺施仕みの蒸気
船とふ船御ハ仕然の大ふて
よりて遅迷をとゝども凡一昼夜
ふて百二三十里ちゝふ三百四五十
里を走るゆゑ飛御船ふ用ゆる
ものハ取分け拝使ふ拝へ船の走
りを早くする是ハ旅人を乗せ
又ハ荷の物を積て諸処に往来
ちゝ大抵ハ帆柱ありても帆
ちゝを用ひず蒸気の力のみふて走

ら世風波の吹逆ふ抱き岸の日限の隙り不遠ハぬ拓
ふ為るより蒸気船出来てより暴風激浪の難を凌ぐ不都合
宜けまべ戦争の攻防と強くして貿易の便利と増し航
海をるの自由と汎しうべ世東の法ふと平均ふし國くの摸
拓と一変為せしもの
此「サンフランシスコ港」ハ日本より東ふ為る処なれども風波の摸拓
ふよりて衝功て往きぐるとなり其内ハ日本の地より亜米理加
の方へ少し近くして南へ隙出張る大洋中ふ近来日本とも條
約て結びたる「サントウ井ス」と島國より路ハ隙徑の廻り不成
もど山「サントウ井スへ船を着るとなり是ハ石炭食料飲水

蒸気船初めて洋中ふ浮ぶの図

るどの都合ふよりてなり「サントウ井ス」國ハ横濱よりの航路千四百八十五里余ふして墺太利刀の内の獨立國なり島の数合して十一その中最大なる島を「ハワイ」と云日本條約十五ヶ國の内ふハ布哇とありて「サントウ井ス」と云ハ
二て「モウ井」島三て「オハホ」島なの「オハホ」島の港て「ホノルル」と是

サシトウ井ス及十一島の王王居城の地ホして太平海と往来する各
ホの往船ゑる爰ホ泊するの処あり港口ハ島の西南ホあり
大洋と港口の境左右ホ洲あり浦ー故ホ箱船ホ蒸気の仕
掛あるを以て是ホ海底の砂と後ひその中一所ホ一の船路を
附船路ハ標杭を建て試ひに浮木を流ー目印とあー太船と
ゝども差支えなく岸ホ近ぐ若ホ在なり土人ハ長二尺
半幅一尺四五寸ホどの丸木ホ穿ちて船となーそれホ乗りて
大方の用ハ使ぶるものとなり四ホ「タハイ島五ホ「モルカイ
島六と「ホレニシヤ島七と「ナイホ島八と「カホーロエ島九ホ
「モロキニ島十と「ケウラ島後の一箇極めて小狭くして人家

なし「オハホ島ハ長四十五里余巾二十二里余あり諸島ともホ
山多くしてホ「ハワイ島ホハ高峻なる噴火山あり其名を「マ
ウナキヤーと云ふ東北の海岸ホ流を成して常ホ嶺より煙
を起ー大空ホ立上ぶり熟雲と共ホ大洋と霞ム山の高さ一
千五百丈ホいたる又「モウナルアと高嶺ありとれも噴火山
ホして峯頭より烟を吐いぐ峻岳峡屹として海面を抜くこと
八百五十余丈「モヲナキヤアと対立せり今より九十年ホあ
島の大地昼夜震動あびただしく遂ホ「モウナキヤアと「モウナルア
の両山の嶺ホより火焔いぐーて猛烈なること一日一夜火石ホ
三里四方ホふびーー灰を降らして数十里を覆ホて傍の海面

暗夜のぬくゐして咫尺と分ちがたし七八日と往て後も日の色朦朧として光り纔放ちがたく日ちらちらのこりもるれる春の夜の俺こしきが如くなりしと云へり

○「モウナキヤーハ」墺太利品中第一の高山なるまたび熱帯ゐて絶頂ゐまたび年中雪の絶ることなく毫赤色の走下るるも海面より高きこと一千四百

水酒水増して地震の兆を知る図

丈ゐ達するまたび雪際と号る処へ到り氣候くして氷雪解ることなく又赤色より南北へ次第ゐ離るゐ従ひ雪際低くなり五十度ゐ近附ゐ及んでい大概海面より八十丈ゐ後の高さゐして雪際ゐ達し南極北極の近くゐ到りてい雪際平地ゐ下るるまたび海河ともゐ氷結び千古雪の絶ることなく日本の富士山い海面より高きこと一千四百十七丈ゐ一里三町ゐ到るまたび四時ともゐ雪の絶ることなく加賀國白山い海面より九百丈の高さゐ至ることなく年中雪消ることなきい赤色より次第ゐ度数離るゝが故なり「布哇」の地の「モウナキヤアハ」海面より一千五百丈の高き

ゝ達ゝ富士山よりハ又一層乃
高山なるゆへ初る熱帯の四時
とも寒さ甚さゝゝ氷
雪更ゝ絶えざるものなり
又因ゝ云ふ亜細亜及の南より
瓜哇の地の東の方巽他法治の
中なる「遜巴瓦」ゝ島ゝ「トムボロ」
と号けゝる噴火山あり六十年程
ゝゝ大地震ありて山の頂上より
火燃え出ゝ全島を揺り動すと

九十時日ゝ後り島人一万二千人
の内命を助るもの僅ゝ二十六人ゝ
ゝ余ハ悉く死亡せり山内あり
ゝの海面ハ黒煙暗ゝゝゝ
立震ひ航海するの恐天を奪
ぎるを能ハず其音ゝハ海上百
六十里を隔てゝ「爆門合膩」の
地ゝ迄ても聞き
瓜哇ゝ灰を降らを涼さ二尺
余ゝ積りしゝゝ日本の噴火

山ハ肥後ホ阿蘇山信濃ホ浅間山伊豆の大島山とう皆是噴火山なり富士山も往昔ハ噴火山のよーホて日本後紀ホ　桓武天皇の延暦十八年三月十四日より四月十八日まで富士山の巓自らら焼出ー昼ハ則焼気暗暝夜ハ刈火の光り天を照し其声雷の如く灰の下ること雨の如ー山下の河水皆紅色なりまこ

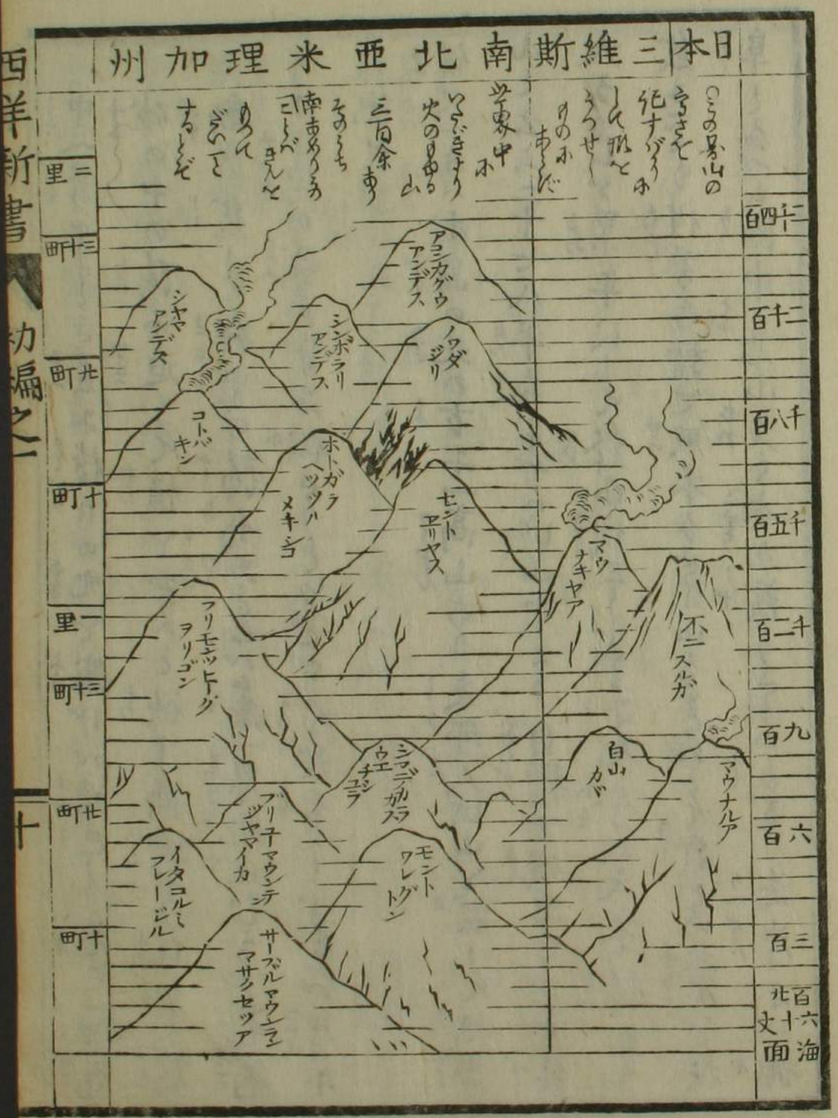
清和天皇の貞觀五年六月大地震あり翌年五月富士山焼る方一三里許り光炎高きこと二十丈雷るり地震きること数度十昼日こと歴て火程滅し頃のほと崩ー石降ること雨の如く焦土甲斐八代郡の水海ヒ埋こ水熱ーて湯の如く魚鼈こる死ー百姓の居宅海と共ホ埋るもの数百家又宝永四年十月大地震

あり同十一月二十三日夜地震きること二度鳴動ー止し己の刻富士山焼て炎高く煙聳へ焦土数十里ホ降る南ハ岡部宿長谷栗橋宿ホ至る翌日稍止んで又二十五六の両日より大ホ焼出ー後石砂焦殺ー灰原宿及び吉原宿の地と埋ること高さ五六尺江戸の地ホもりて高さ五六寸ホーて焼出るところ大の穴穴ー其傍ホ小山と贅生し焼んで宝永山と称し凡山上より火燃え出んとする時ハ必ず先地震ありと云へり地震の説種々あれども未だ一定ー難し大昔日希臘國の大学者「エラサコラサと云ふ人ハ地の底ホ雲と嚢ー電と発しより地震為ること在りと云ひ又千六百一年今より二百年まへ日耳曼國の「

キルチエルと云ふ人は地震は地の底ゐ数多の大なる窪こ在りて一ツの窪こゐは水て充しゐ一ツの窪こゐは硝石硫黄の燃るりめて充ちゐて互ゐ干乾乳沸ひ水て煖め湯乳て蒸し湯乳地上へ発るとき大地震ふゐると云ひ千六百八十二年今より百五年あ英吉利の「スチユケリと云ふ人と「プリストリと云ふ人は地震の発ひゐ歴の所為なり等云ひて其説區々なりと雖も近代の発明ゐは地の底は一面の火ゐして岩千上て震ひ岩の上て古地きて厚く震ふるり然れども表皮の古地又は岩の障るより水漏きて火の中へ流き入り忽地蒸きて湯乳となり千湯乳地下ゐ積こ集り絶ゐ反るき所より発し出るの内ゐ大地震

動きると云ふ又日本大坂の人さ説氏の説ゐは地震は地下ゐ焜の泉の如き穴ありて水溜り陽乳ゐ光ゐ此処より出入ひ陰陽和和して宜しきを得る時は平るまども若し陽乳滞り生ずるを以て歳月を積まば地脹れ水縮まり伏陽は反ゐるきの所より発し出て大地是が為ゐ震動ると云へり又高山より火然ん

○試ゐ地震の形をこらへる図



と欲するゆへ必ず地震あり高山あへ硝石石炭硫黄などの燃るの地下のもきゆへるのころ〳〵ゝ古地突き上ゆゑに平地の所僅ゑまべ地震して伏陽の爰出さるる気ゆゑ〳〵石炭硫黄ゆへ鰐を越歴を爰して火を出せど古地狭隘き山上るもゆゑ是を地下ゆへ保つを能ハゞ古砂岩石を破裂せゝめ終ゆへ撓出ゆへゆまり〳〵

爰ゆへ試ゆへ地震の象を法〳〵る法あり物二三斗戻入るべき桶の中へ廣砂を登りて水を入を桶の底の傍りゆへ穿に找ゆまべ水を下より出で去るを流あの器のごゝ考して穿にの穴より大ぜいゆへて交代息をき入を息十分ゆへ搾の

中へ籠りしとき急ぎ樋口の穴を塞げバ吹き出し息の陽気
砂の中の陰に迫りて桶と出んと欲し桶猶り自ら震
動し然して砂中の陽気忽ちまち震へ忽地止むるり老嫗
小児の戯まるに似らりとい人ども手理をくざまで序に
記し

佐又「オハホ島の北の方に一高山あり支那人此山を指して桂香
山と云ふ二十七八年お半ぐ此山中より白檀を伐出せ〻て莫
大なるしが累年にして終に伐尽くるや今ハ大木稀なり
然れども往昔白檀を成木なせ〻山なるまでなれば此の禁を松
阜しるづく國中禿山多く木立茂りくるらかるゝ海岸に椰

子の大木あり今より八十三年お英吉利の船将「コック」〻〻
人初めてあの島を見出し乗渡りくる時の船長の名を「サン
トウ井ス」とぞしるべ其名を取りて此國を「サントウ井」と号しとぞ
又「コック」より二百三十年を〻に此島を知る者ありて航海せ
しものども諸島に酋長ありて暴戻なる狀態の風を逞しく
政令を施こんを能ハざりしが英吉利の船将「コック」渡海せ
り九十年まへ「タメハメハ」別者の人出て初めて政を立
法令を施こんを三十年佐爲悉く是に属しその子「リホリホ」と云
ものの又政令を賢しく然るに四代「カメハオハ」の世に為りて「デメ
トウデステン」宗の僧来りて寺院を建てるところの神仏を悉く

廢没して支里期甸宗と為て然るに四十九年ゑどあ亜米理加の弘法師数十人まさに島に来り説法教化せんより自来こゝに切支丹宗に一変せり此地両羅まさに延く十八年ありぐい人の肉を食し子産るもの地に埋て生るゝ之を埋め或ひは殺ころしそ

つゝるゝ〜ゝ英吉利より初めて此島へ来りし時の船将カビタンハ「コックヤメスゝゝ人に対て「ヤメスハ英吉利の「ヨルクビンゝゝ村の土民の家に産まれ初稚より好んで書を読み勉めて究理の学びしが後大いに航海の術に達し名を欧良巴の海外に表ろせりゝゝの人なりしが此島の女人のみに捕えられ生るゝに食まさりと云り之に因りて「ヤメスゝ連来りし弥りの者に大いに忍を

船と英國に戻りし事件を以て英人三維斯吉利の女王に始めて

ふ人一同怒りを抱えび再び大軍艦

と差向ゝゝに島人大いに怖るゝ

ゝる逃もんで出合び爰に於て詮方

ゝ只八人の婦人と生捕英吉利へ

連戻り学校の内へ延ゝ日ゝに人

倫の道を教えゝが三年にして大畧

今日の道理を知るに及ぶ試しに

彼の島へ連れ追放せしに八人の

八人の女と連行図

婦人上陸す　教ふ國王ふ謁して事の一伍一什と告げ國産の品稟と
と齎らし　再度英吉利の船中ふ来り厚く教育と受し礼とを
しが見ち人倫の乱れけうと云へり然もど「ヤメスが生るゝ島
人ふ食もちうと云説実ありや否や未だその確証を知ゝ難らら
俚俗の妄云ありしの成んう此國ハ今英吉利支那及びの人と亜仏利
加の傭人と引連来りて接くの居を出せば逃て繁昌ふ及び二十年
ちのところふ中の学校三百五十五う所ふ入り入学のの日と倍加し月と
ふ盛んなり十八年ちふハ國民多く合流ふ成ちて改令ふ従
もんすと弘ふ人ども成らば正ぬ然もども其内ちう合衆ふの運上
會所ちちう彩の如く各國法分の者入り来り國人と教育し且その

人民ちる合衆ふの風を慕ひ学び為今ふ知りて大ふ開化友志の人と
なりちう九十年先英吉利の船将「コック」この島ふ渡りしちハ島人
の数三十万人もちりしとなるど疱瘡生ふ流行病などふて死亡し
あるひハ鯨の漁るどふ少て支るり及へらざる船も年しふ少るるに支
左う人の数遂て減ド為内ハ十万ふも見らぬくるふ成りちう然れ
ども太平海中奥太利ちうの中の猶立ふ日ふ日年ならびふ西
洋の風ともも條約と結ぶふ國王の位と以てしふ狹の島ふる
うして各ふ慢らして支ふる為内國の政事ふ年貢の取
立方さ等ハ亜米理加人ふ教えて為ると云り古地熱帯中ふる
ども度数の割合ちう凌ぎちう大ふ陰晴定まらぬ一日の中

あれ何度も雨降りまた晴るたり湿気接めて深く往来泥路ホして乾くるなり気も古地石砂多くその人足気強るまべ往還ホるの渇るるもまたり古人の風俗ハ如て元若く黒白の二種あるとも多くその色黒黄ホして眼尖ふく口大きく大抵洗足裸体なり身柄宜しきものハ皆と履衣るいと男ハ筒袖股引ホして亜米理加の仕立なり女ハ腰の下へ四角なる布を巻足の脛の下まで下げ白き布ホて乳の上と法くし肩より腰の下まで風呂しきのやうなる布ホて巻くその布何をも西洋布唐更紗の数なり髪の毛の長さハ六寸ばかりホて半月の梯と孔の後方へ載きたる梯へ髪の毛を巻み毛の茂られ抜ホ

三維斯國婦女平居の図

苗を植り又草花を挿ぎ天窓へ巻き赤き木の実を糸ホて巻ぬき数珠の抜ホして首とまく手姿最秀り性質柔弱れども正直なり白き島人ハ紙英吉利の辞を覚え性質もまた柔しこと云り市中の往来ハ井字とあり家ハ材木を以てくる街衢の中所ホ繞を建る家あり各玉人洋間の飾しあり王城を

堂塔の造りに似て軒ある戸ありて毎に妥見の徒あり門ありの窓には硝子板を用ひ市中の家造り大槩ともに准ずれども
土人在来の住居は板もあるを小屋掛にして九木とりて拵へ
るに四方ともに草にて包み玄蘇末あり支那の家は他所と
雑らべ一と続きに軒を並べ別に一連の市街を成せり往来
多く馬車を用ひ人は歩行するにて徒走り女も自身手繩を
採ることに跨り奔走するの自在を得たり女は一人にて歩行せず
男に手を引き歩行し酒を乗せ車に乗せ自分と馬を御ひ
売り徒るるり荷ぎ商賣とする者は諸品を瓶に入れて肩にかけ
持歩く然れども変を変じて賣りのとなべ甑甕の大きさ差渡し

二尺余に及べり夜は火を警むるの役ありて一隊巡邏の町
より時を告べ次の町へ次と伝へ次ぎまた隣町へ送るなり
市街のさま何もの稜ありて夜に入り息行きする者も花唄など
唄ふことなく総て妓楼の外は人集まて酒宴を催すなどもなし
云へ然ども男女の婚姻は至りて実に素しきの極めて未だ
日も暮ざる往来多き座敷の灯の下に行き摺付合ふて低語話す
年頃なれば賑り上る月の隈なき光り差さむるも構はず片蔭に
手を取交へ戯を狂ふ形造あり空地の草の上路次口の板塀何所にも
ても構はず野交して傍の人是を見ども更に恥ざる面色なきに
人一般の風俗なれども赤ざ死化の届なれば所にやまん恥じて女は

男ハ別安く男と云て幸ひの名ひ入まをもり賣女ハ黒人ハて揚代一夜の價金一両二朱ヲ当る湿気深き地白色者く瘴毒あり と云り西の産物ハ硫黄砂糖綿烟草芋小麥の類ハて島人の食料ハ里芋と粉ハるり「ホヨ」なる人物と製し是と常の食とする外此地諸品ともハ至つて高価ハして内のわ場の上り下りいたるまでも大抵米一外ハて金三分ぐらハ炭二俵ハて金三分ぐらハ酒一合五匁ハて金三分ぐらハ鶏卵廿四ハて金三分ぐらハ旅籠賃食料を除き止宿ならり金三分風呂湯銭一人ハ二十五匁小判形の大きなる桶へ側の釜ハ沸しなる湯を汲きて一人ハて半ひその湯ハ蛭一余の人沐浴まもなく釜ハ釜の湯を汲こ込むるり外ハ人の半ふ湯ハ絶て日向水の如し夫白色先

水を汲きて後ハ湯を差ならり偖ハの三維斯ハへ皇國の人ハ航海ハ為し顕ハて史ハる処の一ツニツを挙て花とハん去る安政二乙巳年正月廿一日合衆國の「ハウハタン」船ハ乗ハ人と彼の地の幼府華盛頓へ向へんと横濱港を開帆ハ日と風波悪く海中ハ日数二十四日を経て石炭を不足ハ成せるハ止ハて二月十四日ハ到へ サントウ井ス島の「ホノルル」港へ着船せり港内ハハ英吉利仏良西亜米理加の船ハど十艘ハど碇泊せり海上より島とハ山を望むハ熱ハ ハのまハ常ハ雲霧ハ発しる後なる嶺ハいとまハ見ること稀なり天ハ晴雨定まらハ一日の中ハハ度と変る此日僥倖晴ハ成ハ港内ハ入ハ西地在住の合衆國「ミンストル

り「ヘナ、アと云ふ菓実と俗まり是ハ蕉芭の実なり美味美来瓜ホ似て至つて美味水乳の菜らく上陸する内船中ホ於て祝炮あり亜ホ海岸より迎ひの馬車ホ乗り往ゆ十町余ホて旅館ホ至り門あホハ高き板額あり英字ホて数十字と書ハ館舎の号るゝ途中見物の群集駿し旅館ハ家と五ゝ之よホホつ築造初て材木なく石瓦ホて煉瓦のみくホ拵ら厚さ一尺六七寸ハど ホて積上るなり初家と茅箇之よホも分離て建らハ熱ホる是ハ気と遮んゞ為なりゝで庭中ホハ度く花檀と設け種々の草花満囲ある中ホ日本の鶏頭千日草反菜などあり宿の亭もより水菓子とハゞて西瓜芝菜瓜芭蕉の実なり何とも味ひよ

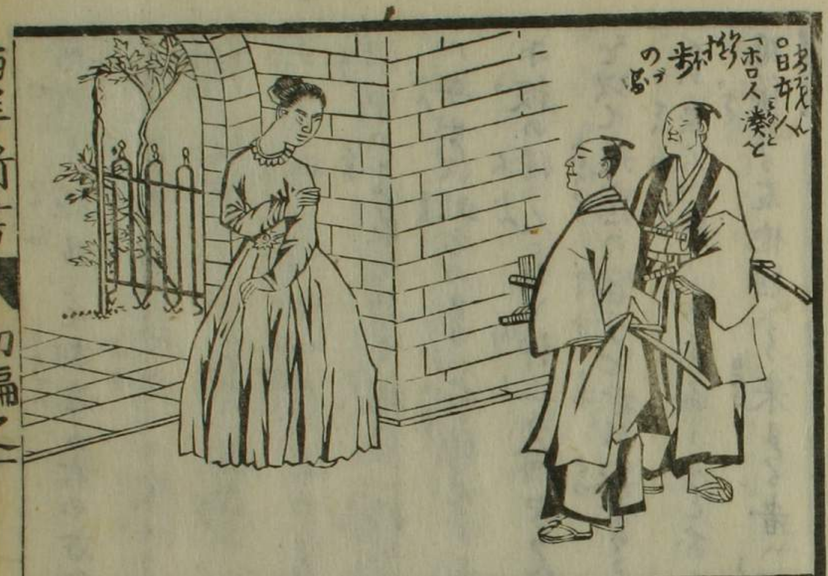
此時二月の中旬なれども五月の下旬の景色ホて瓜唐なりゝ里芋眉兒豆苣午房の類なり何とも日本の物とあるで樹木の種類も数多なりとハ松杉桜梅竹等のなりのとハ異て山上ホハ大木なく海岸ホハ椰子の大樹ホて蘇鉄ハなるさ二丈除樹十万ゝの物とハなるなり此日旅館の園中と逍遥し居らしホ隣

三維斯牛馬大蘇鉄の図

家の亭主妻子を引連れ出来り此方のものを顧みて英語あるひハ仕方を以て頻りに来るとも故に両三人にて彼処へ出でゝ夫婦の去大いに喜び我に案内して楼に登るに座敷の中に西洋もつて支那ものの種々の機械を併りて皆悉く彼の女房娘と共に美しく此方にきゝむ音律最おもしろ已翌十六日あさ五王より二尺の鮨を贈り遠せり此島に鯛の小魚を見ず只唐人の大海を持来るあり長さ一尺余伊勢海老の新鮮にして美味なり鳥類ハ鶏鳩のみ余の小鳥を見ず獣ハ牛馬犬のみにて牛の角長く丈二尺余に及び馬ハ形小さけれども耳長くして一尺に及ぶ驢馬の数ひなり牛馬しもに飛例あり槌と牧ハ年中絶ることなく

蛇も多くて沢山に百足も大なるあり其余種々の毒虫多く刺す市中を拉歩す七八丁に大なる家造りあり内に三味線胡弓四ツ琴ものの音と合せ変声を発し面白きに出すを家へ立入れば異人迎へて案内をする因りて二階へ上りて見れば竪十五畳横八畳ばかりの座敷に牧十人の男女あり種々の拵びをなしてもろ側に玉突の台二御あり毒の中に先六ツあり毒の上に玉四ツあり玉を棒の先にて突突るに玉穴の中に落入れば「ヲルゴホル」の仕方にあり種々の賞あるて変化に玉突とりて勝負を争ひ酒を飲楽しみ拵びるまで階子の左の方なる一室の中へ入りて見るに此処も最広やうなれども地火を

味ふて薄暗く牧夫の寝床うち並びその数四十ばかりあり因りて其訳を問へるに家ハ拉女屋なるまゝ酒宴の後ハ婦人を誘ひ来て雲雨の愛を結ぶなり房室ハそれ〳〵在る惟ふに一室の内の排ふ〻ひふて屏風一重の隔てもなく互ひに情者かさゝ笑とまるとも構ちび歩卧しなりて未ーとあるい実ハ婦國の伝拉先ふ〻人街市の左路ハ肆交して外足と取ざるの風俗なるまゝ此地の拉女ハ悉く黒人ふて悪瘡のるきりのハ〻ーと云り翌十六日國王より鈴五羽と鶏と一尾贈もりもの日商ふの「ソウテサンド役のりの一人来りて説話ける〻二十年先ハ日本の私商地へ漂着るり私い尽く崩れ乗り組みるり〻十二人ハ永中ふて死失せる〻一人命を保ち



居る者あり助けて商島へ至さりしる後ハ合衆國へ渡り終ハ其生死を知ざるるり之ぞ彼の者の伝ふ所なるふて今日まで大切ふ仕舞ありーと取出ぢて示開ちて人〻ハ大日本國外山橘政吉と書てあり大軍艦の蒸気械を以て航海ちる人若しも伝え雑りーるとなくば漂流人が困苦おりひやうとも谷吻と涌息ちひらり午

門後より拄杖にて旅亭の右の方へ十六七丁往て小一つの山の麓へ出こ、き麗なる三階造りの家あり庭中に数種の草花咲ほこれ行とゆく弦き風雅なるこんえけまこと其庭中に立入り草花を詠め居らしに家の内より硝子障子をひらき年の頃二十三四なる婦人立出て一礼をなし園中の美花を折て銘を小一枝づゝ呉れ何々と説話ど言辞をぜざれバ無ぜん此方のものハ家化なるまゝ猶家のうち人入りて見んとなる彼の婦人これを押止め何やらん言へども解せざるまゝ種々の手真似を以て迷惑の容子を示し察するに亭主の留守中他の男を内へ入れんに良人へ恐れるものなるゝんとおもふもそるゝ此地遊行者ごゝの風俗なる故他国より来まる者ハ取分け男女の分らて面白くて嫌

偽を遊るものとうたゝ愛に於て花を美ひ礼を述て家を立出で往すまゝ五六丁ホして左の側の小川の流に黒婦五六人裸体にて水を泳ぎあそぶ又水の中ホハッ孔芋のごきものを多く作りゝると見る手処まで七八丁ゆくホ亜米理加人住居区あるる門より人出ると二階の窓より十七八才の娘の此方の者とうたて手振くあり故ホその門内へ入らんとあるとき

日本人「サントライス」拄杖の図

家の主人門口まで出迎へ奥座へ案内する座敷の内には花毛氈と
赤き正面に姿見の鏡と左側には種々の額面と然るべき方々に美蘇
と云ふ名椅子に腰を掛て時此家に憩ひ休て立出で又三四丁往に大いなる家造りあり這入て
見るに酒と商ふの見世なり亭主は各に酒と勧む酒の色赤黒して
味ひ苦し亭主稜くの「ヲルゴヲル」と見せて後巾五寸長二尺ばかりの
箱を拵へ其の中より木にて造りたる長さ三寸不ばの丸き棒に紐
の附たると二本出し是を一本は方に持せたるのみを彼方に持せ彼
方のまを程一人のものに拵せ一人のものに片手に今一本残りたる丸木を持
せ亭主は彼の箱の釘の如きものを出すと持て回せば三人とも熱身

痺を言舌まらずして進退自由なるわざを互に眼と眼とを合せて放
さんとすれども離まじく如何に論術なりとも亭主廻しなる釘の
ものを止めまじ忽地身体自在に元の自己に変ずるを愛に於て
初めて「エレキトル」の仕掛なるものと知り各一笑を催しぬ
○「エレキトル」とは希臘の語なり日本の語に伏せば美色き琥珀と
いふを以て此「越歴」の力を美なる琥珀より初めて見出せり故に
此名なるべし「越歴の発するとは「越素」にして天地の間
に有る万物越素の質なきものは非ず然まば越素の物に感じて
働くを越力と云ふ也「越歴」は「越素」の多きに脂類埴
硫黄硝子などに猫の皮などを毛織の類に強く磋

り之後ハ拄き物ハ近つくまゝ拄き物と忽地ハ引離るゝより共
磁ゝ物の生質ハ在る紙素より紙歴を発さるハ一ハ物と引
離るゝ紙歴の働きより玄黒ハ限らゞ何ハても物と手張ハ
張まゝ越歴と発ハと雖も前ハ記せしものゝ如き事なハし
爰ハ云ふ「越歴の一寸の理ハ」と和蘭の「ハンポマチュ
ムゝゝ」人英吉利の「子ールヌノ」と云人なゞ遠くハ工夫を凝し
拝くの機械を設け其術大いハ開けしより終ハ傳信機雷除柱ハ
の発明を得るハ至まり千八百八十九年日本の寛政元年ハ当り
今より八十二年まゝ以太利國の医師「噂喇婆尼」と云人
蟇の解部とゝ云し皮を剥腰の神経と支御の筋ハ沿て後の

張金ハて突張を拵ら之拭おきし
此蟇忽地ハ生るゞ如く御を動ら
して飛出と云て蟇の越素ハ徒
二種の弓ハ感ゞ越歴を発せ
と云ふ云量の工夫を凝し早ハ
動越歴ゝの事を受ゆるゝより
動紙歴ゝ物の中ハ働くと云ふ
静越歴ゝ物の外ハ働くを云ふ
又陽紙歴陰紙歴ゝ云ふ陽
ハ陽の引力を受ゞ陰ハ陰の引力

と受さるゐど之を多猶ホ去て
髮ホ解き雖し然れども其「越
歴の発ホ物ホより之を気と受
ると受ざるとあり人皆ハ之を気を
受るものゐる故一人「エレキトル」ホ
感ずれども其人ホ迷ひ人ハ他人
ホも即座ホ之を気ホ感ずるを
始めの人の如くホ一人癖を動く
と出来ざる振ホゐるより因りて
越歴の強き物ホ手足ゐど障

流より「エ」キテルと
出る図
白き紙と
黒き
四ホ
之
あるく
火あり
夜あるひハ
之ホあき
早く
凡先ホて
とすれども時夜あり
火ぞると出る
也すれ「エレキテル」の
変すゐ

れども忽地感じて動くと出来ず終ホ死ホ至ることゐり
初て其日ハ旅館へ戻り同十七日今日も市中を托歩きゐホ日本
人と見物ゐるんと群集ゐる異人の中ホを取りて我家へ連れ
菓子酒あるひハ氷ゐどと出し食應ゐるゐの者あり家造りの
度数の指へおホ人而と大方似ゐり氷ハ「ハワイ」島の噴火山「マ
ウナキヤー」と云山上より特来る物ホしたの山の頂ハ四時とホ雪
消ると云へと云り依ゐて大きゐる呉服店のまへへ出ゐり物調へん
と此人世へ立入りゐホ亭主出できゐり奥の者へ案内ゐる子孫度
の摸振いと笑葉ホして ゐる撫の ゐゐる而あり四方と人時し海
面の白浪殘ゐり ゐゐるど凡景一入ホりゐ此家ホて年のゐど三十

ぢうの男氏方の面相形ち刀衣服みづからく摸写しうるゐ其
図絵密ゐ出来るゆゑ是と誉けるとば画と書くる男大らゐ丞び
仕るう亭主の話しゐこの者ハ英亜の産ゐ所ゐ一の画工ゆゑと
云へり実ゐ然るや否や筆ハ「ペンとゝ物ゐて毛ゐハ「ぺゝ又ゐの
家より三四丁ゐ」て学校ゐ設る廓内廣く中ゐ教場あり七八
才より十五六才まゝの男女数百人出て読書習ひて居ゐ
彼方まゝと見物ゐ暮ゐ及んで旅宿へ戻るゐ人見まゝ
の應答亜米理加人と支那人ハ日本人と友色ゐるのゐ深しゝとゝ
英吉利人ハ情実ゐ通ぜ難く同十八日午時正使外一同王城
へ参ゐる馬車ゐ乗り王城のかまへ外ゐ数百人の云年小統と

持て警衛ゐ乗り正使門外ゐ到ゐの亜将馬上ゐて出むく
館内へ誘引ま館中ゐハ「ホヲハタン」船の「ソルジユル」役数十人ゐ
筒と携え應接の終るまゝ護衛ゐ最厳ゐ国王の側ゐ
ハ其妻の婦人も侍女二十人ゐ引従て列席ゐ城廓ハ
て狭くして要害の構へ多く造りの英蘭ゐ
り氏夜市中ゐて「タンス」と催ゐ是ハ此國へ日本人初めて
る航海のゆゑと視しゐ云り「タンス」とゝ笛太鼓三
味線等ゐ種々の鳴物の音と合せ踊るゐり氏難ゐと「ミヨウシツ
キ」とゝ男女ゐと採ゐ「ドヘ」男二人ゐて女一人の子と云るもあり
踊りゐ初め足拍子ゐ踏るゐり氏内國王ゐ及び其夫人も見人ゐ

雜りて躍る寛易なると以て見るべし日本人市中を往来するを島人群をなして後より附きまとひ「アロハ」と云ひ掛て挨拶す「アロハ」と云ふ意味なり又家とりい「コムシ」と云て呼びかける「コムシ」とは送りとゞまるぞ此港に二十七日まで滞船す

船の破換せしところ修復出来まで纔に解「カリホルニア」の「サンフランシスコ」港をさして出帆す

「オハホ」島人口八千人ほど「三維斯全島の人口

○國民　七万余人　○亜米理加人　二千人　○英吉利人　千人

○支那人　千余人　○亜弗利加人　五百人

総人員　七万四千五百人余とかゝり

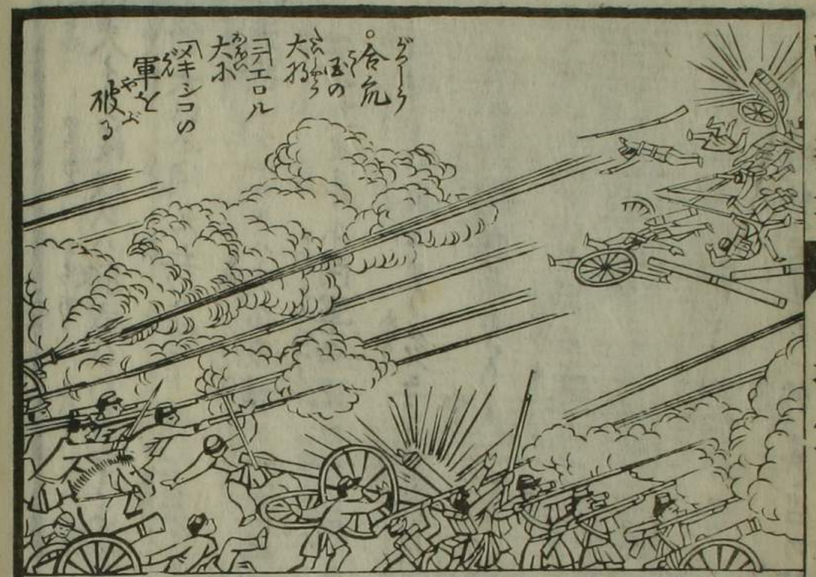
「サンフランシスコ」港は北亜米理加合衆國領「加利蒲尼亜」の西の方に接し山凡嵐紫翠古の説

濱港より真東に遠るところの海岸にあり太平海中第一ぢんの大港ほとんど湾の入り口狭く僅に二千七八丁ほどにて右の方の陸地に二ヶ所の大嶽場あり此臺場にはそれぞれ二丈廿一大筒を据おき壬王の大きさ一尺六寸ぐらゐの物なり六七十丁ばかり届くと云へり入り口の両岸に連々なる小山打続きたるもの一里半ばかり入りて港にあるに左の方にある島はこれまた嶽場ありて要害なり堅固なるこの入り海さて三十里余横七八里にて数十の小島あり義千艘の船碇泊するとも差支なし

元亨二年に合衆國の大棟梁「ゼイムス、ホルクヽ

人在職の時この國の南境ひにあり「メキシコ」と云ふと合戦ありべり「メキシコも共和政治の國にして其ふに属しあるし「テキサス」及の人民「メキシコ」を放ち合衆國の方へ從ひ居るに因りて「メキシコの王人怒りを発し大軍勢を挙てして「テキサス」を攻んとの企ありあり爰にあいて合衆國の陸軍の総督「テエロル」と云人先ぶ勢をひきい「テキサス」の應援として彼の地に出張あり「メキシコの國境ひまで押付ぶ要害の地に依りて不意の備へを設けり然るに千八百四十六年今より二十年前五月果して「メキシコ」及の軍勢「テキサス」へ押寄せり遂に戦争始まり最初の國境ひにあいて両度戦争ひに及びしと手初めの軍と色

夫より後或ひは勝或ひは負さるに勝敗変ー雖きにより「メキシコ」及の大将大いに向え兵を增ー将と多くー一時に勝を取らんと合衆國の大将「テエロル」は夫に構ハば彼の小勢を引具ー「フウ」ウスターと地に於て早に両軍必死の接戦に及んぐり此軍「メキシコ」の軍勢合衆國の兵士より多きを四倍るとども合衆國の陸軍総督「テエロルの軍配図に当り大いに「メキシコ」の兵を破り十三分の勝を色うべ「テエロル」の英名遠を振ひのち終に「ゼームス・ポルク」の市に次て大揀選に任じ山後の勝軍に「ヨウワ」及「イスコンシン」及の二国も合衆國の版図に入りしべ勢ひの度大るに乗じ「メキシコ」と條約をもて「カリホルニア」尼亜の地と金二



億一千七百万両の高を出して永世買取り合衆國の版図となるべき筈

千八百四十八年ホルテ今より廿三年前日本の嘉永元年の頃ホ當れり「サンフランシスコの港ヨリ「メキシコの版地ホルて四十年あまりの誠ホ淋しく人家七八軒の小村なりしホ千八百四十年今より三十一年前日本の天保の末ホあたり此地ホ濱山ありて金穴と呼ぶ一法方のあたり集り

来り住居する者五千人余ホ及びしるしーグ合衆國の領地となる千八百四十八年今より二十三年前人家皆焼失てほぼ三四十軒残りしるし然るに國家將ホ興らんとする必禎祥あるの前言実なるべし今や合衆國の大いホ興起せんとするの時なりしるしホ狂物ホ大濱山と呼て数万ホの金穴とそなへしるしば「サンフランシスコの地ホ町をなしたる万事ホ不便利なるしるして千八百五十年の九月今より二十一年前五百軒余の仮家と建しホ人口ハ五六千軒なりしが此事と雖ども諸方より人集り来り皆ホて家数一万五六百軒ホなり屋い支那の造りと用ひ市町美麗ホ張きしるしども連年火災しるし焼亡すること三度ホ

及ぶ然るども火災を免る毎に市中一倍立派となり美麗を尽し屋
と募り莫大なる入費を掛し家居を生業の為に一時の煙となす
と雖ども向後火災おのづから市中一般示し合せ丘を崩し
谷を埋め僅の凸凹あるところも皆平地とし家を建るの地所を廣
くし材木を用ひず石瓦を積あげて家を築き家根の上に雨水
の溜るやうに拵へ火災の時の用に備へ市中は高低なく西東の
通り四十六條南北の通り二十五條町のなかさ東西へ一里南北へ
二十四五丁にして商賈人家二万四千軒人口二十万に至ると云り此
地日本と同候大槩ひとしく産物いと多し金銀銅鉄水銀石材木
五穀菓実牛馬豕羊野菜ともに乏しからまで何に一つ乏しと云こと

なし夫故に諸國の人入りこと来り日々に人員増し金山とりこと後
世とする者十万人余に到まで金銀を掘出すこと莫大なり一七
日の間に七十五万両余の銀と掘出し年々に三千五百万両の高と伝
國へ積出し世界中の金銀のお場と恐れる程なりと云へり然れ
ば市中繁昌なる弊に運上所の費大なる其普請に六十万ドルを費
やせしとなり学校は三ヶ所よりて男女五六才より十五六才に至る学校に入り
十五六才にして学校を去りぞく童子往来して師に近づき礼儀正
く接拶して敬長屯牙の風俗最厚し金銀の吹立所あり皆悉
く蒸気機関の力を以てなり

○蒸気機関ハ「ゼームス、ワット」と人の工夫にして「ワット」ハ千七百

二十六年今より百四十五年まへ英吉利の「グリーノック」なる愛ふて産まれ人ふて窮理学の奥義とさらに本草学猴山学等の達人なり年僅うふ十四ふして「エレキトル」の器械を製し出せるあり此人生質病多ふて他行するを好まず一日家ふ居て茶を煮ようふ茶瓶の湯気沸騰するを見て忽ち一工夫の基本を発し茶瓶の蓋をうへ又ときを震ひ瓶の口より湯気の出る処へ匕を当てたるに淄りて湯気の水と成りしを一滴々計り居らしふ其叔母なる者傍より之を見て「ワット」心中の発明を知りて益々多くを為しかん可惜時刻を費すなとて嘖々と云りそれぞれ「ワット」が煮沸の蒸気

機関の監觴ふして二十有余年の月昼夜の丹精工夫ふ因り終ふ大業始ふ機械の全備と成て大業始まりとなり蒸気機関の大器を云ん蒸気は湯気より湯気ふ力をるてん釜瓶瓶などふて湯と沸ーゆるふ及んで於の蓋と吹上るとき一合の水と烹る火の力と強くしてを為尽く湯気とるふ至

○「ワット」が瓶の湯気より蒸気機関と変化の図

まず一石七斗の蒸気ありて千七百陪の容とるるあり其大器はまづ石炭を以て湯を沸しその湯気をもて炎より「シリンドル」と云ふ筒に移し此筒は水鉄炮のごき仕掛にて筒の内に鉄あり鉄に心棒をつけたり棒は筒の外へ出て鉄は筒の内にあり此鉄を湯気の吹出し力にて種々動くその働きを心棒に伝へて機関運搬の元となる既に心棒の動くに成るべ種々の仕掛に移し変くに力を移し云のごくるを大凡水車の仕掛と同し蒸気関の力は「シリンドル」の大小によりて強き弱きあり此強弱を馬の力に擬べて勘定する蒸気の馬力とは是なり一馬力とは三百二十七貫四百九十二匁の重さを一分間に一尺六厘

ずつ挙る力をいふ昔は歐羅巴の諸国亜米利加にて物を製造するに皆人力を以て為るを日本及び支那などに見ること久しく千七百二十年今より百五十年まへ日耳曼の人「レオポルド」蒸気を以て人の力に代んと為るの説を起し次で千七百六十九年より千七百八十五年今より百二年より九十年におよぶまでの間に既におおいに説るところの英吉利人「ロット」初めて蒸気機関を発明せしより以来西洋の諸国まで亜米理加にても益工夫を用ひその用法を変じ船を走らし車を転ぜ海を渡り水を汲み山を掘り田地を耕し羽毛の荒金を製煉し材木を据り金物をせんし木具を造り毛綿を紡績し機械

織り紙を製し板を搾り砂糖をはくり麦粉を磨るなど大小の工作こゝは蒸気を用ひざるものなし職人は唯機関の運物ふん附するのみにして嘗て手足を労せず一人の力をもつて数百人の工をなすべしかるゆへ美なり蒸気機関一と度世に行ひまてより世界中そこばくの工作貿易の風を一変せりと云へり

海軍の養生所あり仏蘭西の普請廣大なり寺もまた形ゝ立ちをれり「メトロポリウン」と云ふ大芝居出来ること約二千人ばかり入るべし役者は男形は男女形は女なれども外は黒人の芝居なり役者同しまた支那人の芝居は我邦のごゝ女がさと

ゝどの男なれども女なりたし繪千品の寄せあり

芝居の摸様狂言所作の巨細なるまたし繪の仕ようけ手品人まねゝのみは此末華盛府の條下ふるせり

こゝをぞろい人ゝ稼ゝの工夫を法けれ利法の所具式製そる店あり金銀ふて小なる物を拵らえる世あり羅紗ふらんげらして織出し不あり酒をつくり砂糖を製し産物の所大いふ開けこゝとば諸國の商船あつまり来りて港に後をおろし一年のるにて船の出入り二千艘よふ紅りこゝる運上の高二百万両ふ下らじと云へり実ふ太平海の東岸ふるゝびかゝ大都會とゝるこゝぞ金銀の融通徐まり宜けまべ法猶負倣ゝるゝど自

○支那人三維斯の金丸ホ傍くの図

づと流行する故人気ハ何とも驚あ〻変風もあり支那ホてハ地を金山と唱へ活半のゝあホ渡来ー居るるの婦ハ男七八百人女五六百人ホ及び元手金多きるのハ見世物出ー残るのきるのハ金場の人足とあり女の貧ーきるのハ多く花女とうて居きり一緒なーホて本を出来色るのも四五年辛抱しそれ慈ホ元手金を拵ら女ホ〻成るるのもそれバ

此地ホ見世を出しそ一生居ル者もあり然ども支那の人民日傭人足花女とうんとそ万里の波涛を渡いて此ホへまで来るとそ人バ清朝衰微の志ーきるて初めペーカる繁華の市町るまび火るハ殺こるりとそ人ども高帝ハ林木を用ひび石瓦吾と以て築き建る家るまび一切焼ホして数焼あることを更ホなー火るあまび早半潼を打ゐ〻ー飲て人救を集るるり火消を昇ハ階子龍吐水の数ひだりホて就吐水ハ「ホンプ」と云て海獣の革にて拵ら人ら筒を捻ホて絶ぎ合せその筒の先を水へ入まて水を吸ふげ拵ホ仕掛のあてるるものるり此を具先ホハ市中の所〻ホ傍りてあり出火のときハ先を車ホ乗かせて引出ひホて物人ハ且てるく隣

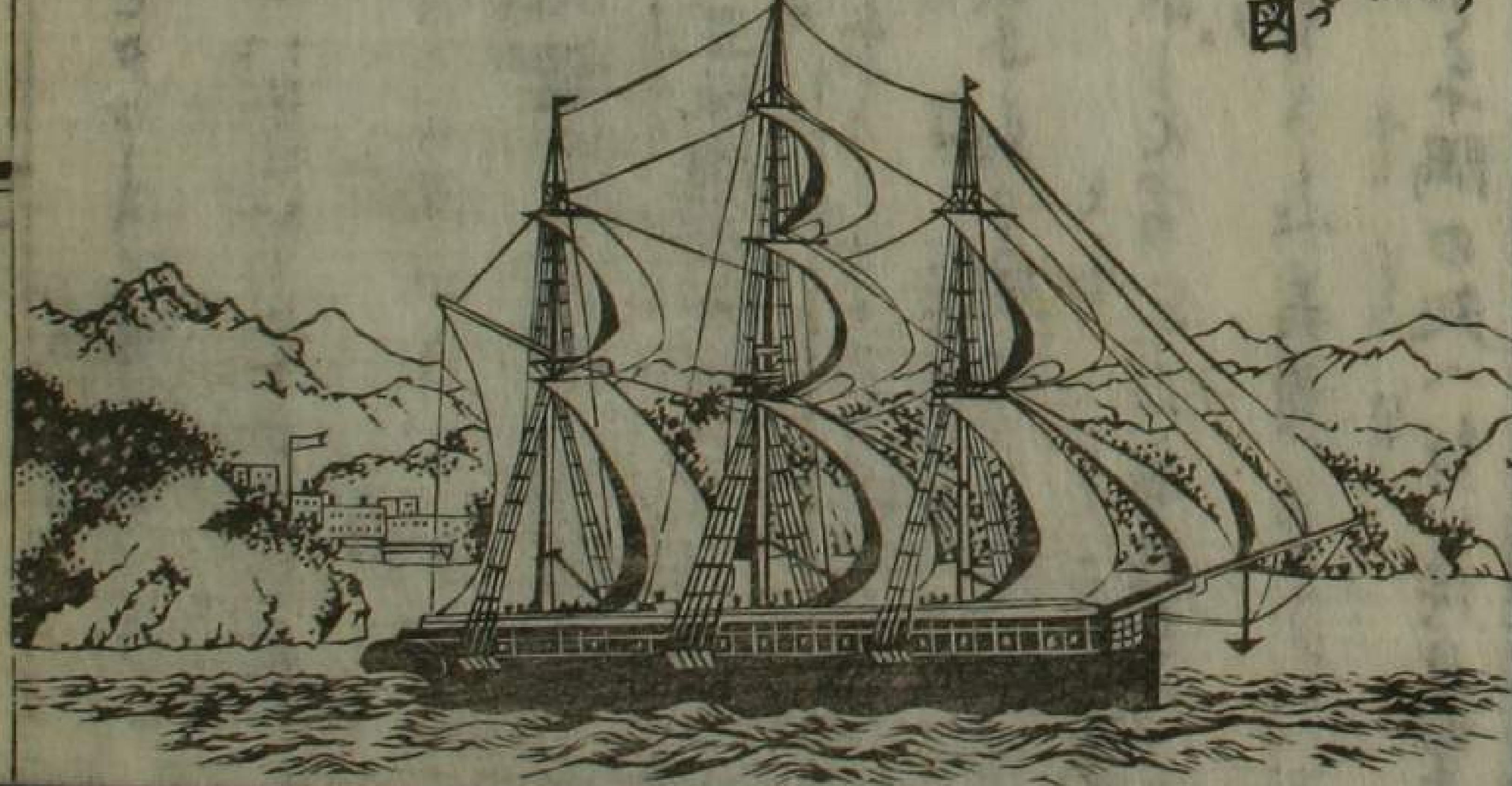
家より火を出来るとも其侭ハ商賣として居るるの港波戸場
あり海面へ十ケ所ばかり三十ばかりの桟橋を出し荷物揚場と
なし海の水岸まで深く何れどるも大船ハ桟橋ぎんまで
自由ハ出べし港内滞泊の船へハ山地の商人小船ハ乗りて諸品を
賣ハ往来ハ商港ハ陸船とも海の中へ莖茎と捨る者あるべ多
分の石料と為る丈ハ岸の波うち際ハ人ども水夫羅ハ底
の砂を透ハ入れ港口ハ高き常燈臺あり海上二十八里の
所ハ此燈火見あるとぞ桟橋を地蓋の入用金ハ各ハより入
津の商船魚漁の小船より見を見揚るなり
二月廿七日「サントウ井ス島を出帆せ皇國の使船三月九日ハ

合衆國領「カリホルニヤ」の「サンフランシスコ」湊の海門ハ
ハ港の入口狹くして一里ハ見て両の岸ハ小山あり左よりくハ
遠見櫓と造り十丁ばかり入りて右の方ハ築き蓋
あり其の後方ハ四角ハ築き蓋場あり高さ十五六尺四方
一丁ばかハ見て炮門を三ばんハ構へ内ハ大砲数挺と備へ
臺場の内より裏手の山上へ長き櫓を建て西洋の石を丈
より一里ばかり進み港へ入るの所内海ひろく数十の小島
あり港をきハ島の山の中腹ハ石垣を築き高さ一百半ばハ
築き上ハ塚の上ハ大砲四十六門ばかり備へ山上ハ遠見やぐら
あり港内ハ数百艘の大船碇泊ありその中ハ魯西亜ハの軍

艦ありて「ホウハタン」船に日の丸の旗ありしを見て忽地彼の船にも
日の丸の旗を揚祝炮を発しより此処に暫時船を止め「メヱ
ルフ、アサブン」といふ地の「子ビヤアルト」といふ所へ往その船路水巾
七八丁より十四五丁ばかりにて三十里ほど登るなり両岸の小山ちと
連なりて大木なく草木ともに刈込をなせしがごとく青草ハ茵と
敷るが如くに見えて人家も稀にハ在りて消残る遠山の雪の鹿の子
斑らなる風情実に船路の眺望帆を上げて岸の往かと詠じける詩
も思ひ出られて雨静更に妙なりける此処にも又臺場あり
既に「ホウハタン」より先に横濱を出帆する皇国の使船咸
臨丸ハかの「子ビヤール」といふ地にありて船の破損せしを修復なし

居るに因りて「ホウハタン」もまた
「子ビヤールト」に来るなり此河ハ
水巾狭しといへども底深くして
大船岸まで着ことなり水かさへ
ひろまべ又廣がりて大海の如しと
云へり「子ビヤールト」ハ船その外
諸造作場の名なり此地にハ掛
りの役人の家なり僅七八形なれど
在り然れども河向ふにハ二三百形
の人家遠より家の造りハ大がん

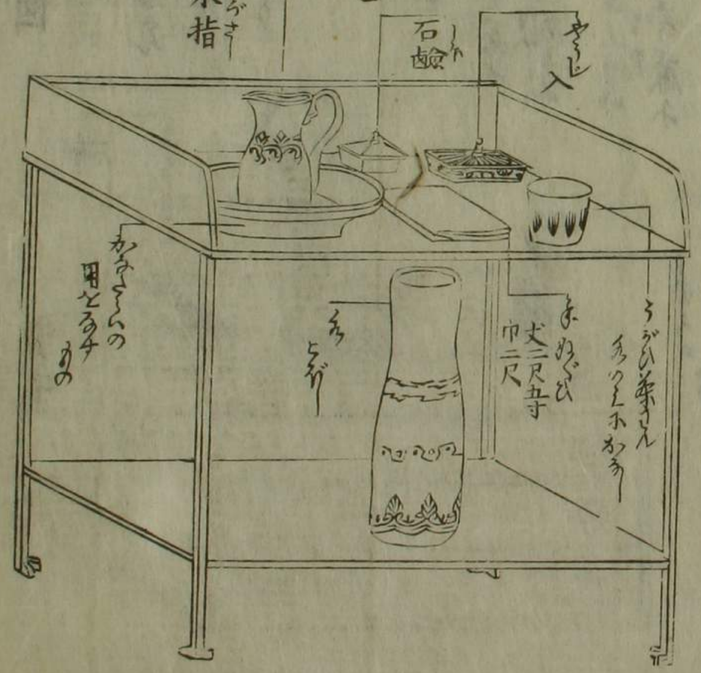
○三維斯港口の図



「サントウヰスホ類に夕刻ホ私将「カビタンより雞と鮫とを買り南河ホて漁しる魚多くして同十日「子ビヤールトの地へ上陸し此地の「コモドヲル役の宅へ往て家作ハ三階ホて門の左右ホ「ギヤマンの高燈籠を立て庭上ホハ廣き花壇とまゝけ種との草花と咲せるとして諸多ホ美葉と色ーとり絃て亜米理加の人ハ多く花とを乱れたる多最深ー月十日河蒸気私ホ乗り「サンフランシスコの巷へ出き波戸場より車ホ馬車ホ乗り旅館ホ到る途中見物人群集すると雲霞の如ー旅亭ハ五階造りホして百毎ホ窓ホ牛姿こんの境「カップリ或ひハ種とこの額るどとをるゝ美葉多くて目と驚るゝせり彦爰の数二百余ホして一百ごホ隅の処へ紐とはけあき

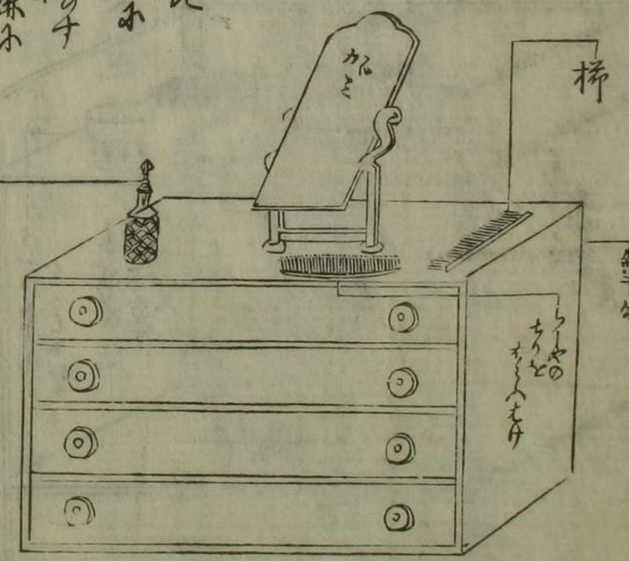
○手水臺の図

西洋人の癖ホ手水桶の蓋ありて手水ハ勿論食多の前後ホ手先と洗ひ手と洗ふと多と為し此図中の大きなる桶ハ別と洗ひの用と為の蓋の下の盥ハ多瓶ー



○簟笥化粧具の図

此器ハ簟笥の上ニ置て
更る処ニと西洋服ハ
多々まとびかゝるとゝ
考るニ
まとゝ
るぞつけまとびとるの
内ニ
逃るとゝ
考ル人ハ考ルの周りニ
考ル不浄とゝ
西洋人ハ身の
考ル



客用ニ
番附と下げて
と変ニ来る
廣太の住居ニ
樓上ニ
亭ニハ二百人の余も居
人と下の
横十八尋の室ニ
処ニ来り
食事先吸物の

客用ニあるとまとびその紐と引ニ紐の先ハ亭主の部屋ニ下り給と付
番附と下げてあるを呼ー番と是ニて知り下女忽地ニ用事
と変ニ来るより右の糸ハ什金ニて名と「コーベルグラアー」と云かく
廣太の住居ニ手と叩きても少えざるとまとび誠ニ便利の工夫なり
樓上ニ彼処ニ若き女怨形居り是ハ行きも賣女ニて此旅
亭ニハ二百人の余も居ると云り食事の時ハ半僮と称るー諸
人と下の座敷へ考せ集さるより食事場ハ広ゝて廣く竪三十ゑ
横十八尋の室ニ中と右左との三ヶ所ハ長き腰掛と考人男女とも此
処ニ来り椅子ニ腰と拭て食ずとるより此日夕飯ハ異ニ料りん
食事先吸物のできりのと白き大皿ニ入まて出ル鳥の油ニて味と

付る春魚干の如き魚あり塩乾更ホ乾より大皿へ「パンと杉形ホ盛りて出し其後大皿へ肴と盛出し亜米理加米のよーホて味ひハ丘稙ホ似る夫より牛肉の煮麦に牡丹菜の蘸菜と白き豆の煮るを出し「カステラホ砂糖味噌の拵る物と附る」て両度出し生鮭と湯麦ホ煮るを出し一鰈ホ似る魚もあり茶の換りホ「コウヒイ」るものを出し若くハ砂糖を入きざるバ硬ク出来ズ「ハンと安」て料理致るあり仮令ハ一人毎ホ「コップ」ホ水を入るを出しまた茶子糊椒砂糖塩の類を不〻へ出るを実ホ叮嚀る料理ホて大純走のよーるもとも我朝人ホハ牛豕の油の匂ひ臭を穿ち且塩乾るけれバ

ものと食ひ悪しきものとも空腹るを也バ何とも些でハ食ひ得ず依夜ホ入りて寝るホハ一百毎ホ寝麦あり麦の長さ六尺余幅ハ一人寝二人寝程あり白き紗ホ似る布と下げて寝麦の四方を包む手さゝ仮帳ホ異るゝ寝所を他人ホ見せざる為るりと云ふ寝床ハ釣タホ下女来りて敷き直し枕ハ一尺余の絞り枕るり同行の中ホて何グし

る人寐んとするに枕及び彼方此方とゆれ動く床の下に白く美敷古瓶のごとき物あり僥倖と採出し耶鄲の非に是混丹の枕ありと晒落と言ふべく彼の白き古瓶の如き物と枕と為し打卧しうち打しも下女用ゐあり之を携へ来り此件と見て驚き呆き顔面持ゐて矢庭に枕と為し居る陶器と採らんと手此方に漸くのゐて見附いだし枕と為て仏地よく眠気さしる美の端倪を窺ふさまにのみ成らば枕と入換後ひ徙んと為る妄礼さに忽地怒りの新と眼らし笑赤ゐて理屈と双らべ是と爭ふ互に言辞を尽せば只大声に罵るのみにて側に打卧しる男眼と覚しいるの

起りしと周章躍起かしは云辞の為る者の二人が中へ押入りて下女に向ひ何ぞ汝の枕に居るものと訊も云ひ引後ひ徙やと雲ば彼の下女さし笑ひと舎と此古瓶に似ゐ陶器に小役と為る虎口る家内廣く小役更徙に遠き方百毎に是と金に中へ小役と為るる其小便と為るものと枕と為て寐て居ゐ様るきすと存じて採りる為る吏とも小手者かのおのそび小便と為る物と枕に成さると是て此方に新に食世呆きて詞も無りしう自己の内に離是る亟へ徙バ兎角君遠の咏しあり況や「カリホルニヤの」「サンフランシスコ」に於て人あやと果に三人服と叩きゐぬ笑ひと僂しう今日使

○寐臺の図　ふとん

幣の河蒸氣船ハ海上ニ移り移るとき臺場ハ空砲を発シ礼ヲ為シ「ホウハタン」船ハ於ても税炮を発ヘシ其ハ一発ハ止メ其士官「テレンヤール」の指揮ハ大炮を発セ船ハ折悪シく地の「コモドヌル」陸地を通り過リ筒先ハ来ルハ空炮ヲ以テ礼ヲ為シ近ク煙ハ行ヒ面上の皮肉破レ血流レ鞭ク衣類

ハ粉離シ空中ニ飛散シ絶シて地ハ倒レ死ス人驚キ紅集リて是を助ケ為ル家ニ連ル是ハ仍て税炮を止ル

そ後十四日ハ空炮ハ打ル「コモドール」役の家ニ足繁ハ往ス大病ハ日本人の足繁ハ来ラて再ビ病床ヨリ出て一礼を為て面上ハ流レ血式ハ語を為て一眼ハ年ハ為ル「メキンコ」と「メキシコ」と戦争のとき不免の災難ハ宜キ為の眼ハ強く煙ハ為ル為ル半身ハ濕爛て不通と為ル何ハもして一眼ハ助ケて然ル為ル年既ハ六十ハ及ブ死ス惜ムベキ命ハ非ズ為ル戦争せしの説話と為ル更ハ衰ヘル景色と

こゝ毋に実に勇気の大丈夫うゝして各是と嘆称すゝ同十二日
一ちゝ　そんぐの　市中と見物せに稼くの商人の大店あり三丁ゝどの名支那人ぞ
うゝの見世ある町あり何をも漢字を以て町所家ゝの名ゝ賣物
の諸品茶瓶などの名を記して看板と出せ一ハ本玉東京本町
ぞゝの茶瓶屋へんの模様に似て人ゝ故々と名の情を記せり
支那の婦人ハゝゝ紅粉と粧ゝ人ゝ此地の犬ハ脊の高さ三尺余
ゝに肉肥太りさまゝ何とゝ不気味ゝおのゝはるおの夜旅館の食
数ゝて大なる蒐と一ひき寸数せと「マトロス役来りゝ蒐と小
犬ゝ投ゝ元ゝ犬来んで見と咬ゝ猫のゝゝの日ゝ犬人れ
家へ呼色ゝ食餌と携又途中ゝて梨と林檎と買ひゝゝ二品

○三維斯
支那人
書房の図

とも味ひ宜ゝうゝて尤ゝ美遠へハ
此地のゝのゝハ非ざゝゝ同十三日正
使運上所ゝ出ゝ屋造り廣大
ゝて模様ハ我邦の芝屋ゝ屋ゝ似
ゝり左右ゝ桟敷あり中央ゝハ高
き壇あり下段ゝハ亜米理加英吉
利仏蘭西魯西亜和蘭ゝと初
めゝて各玉の役人且商人ゝ多ゝ並
列と正ゝ並居ゝり皇國の正使各
玉の人ゝ始めその對面るゝて正

使の名代〳〵て亜米理加の「テーコル」役高臺へのぼり大音声ふて一同へ礼
式の口演終りて後祝炮を発し音楽を奏し夫より大酒宴とゐうゐう
正使亜行の途中ハ家毎ふ四階五階の上まんも花毛氈を敷つゝれ
老若男女押合ひて我朝人珍足物まるさゑ本国の柔礼の新ふ異
〳〵ふ月十四日「テヒャールトの地へ上陸せ〻此処ハ本国の東京と礼
候月祇の場所ふ今孫生の半端ゐとい稀ゝの美花さいをいと
長宋ゐる北辺の京色の面白さふ指美ゐ〻ゝ〻ゝ時とうつ〻〻り同
十五日買物ふとゝ上陸せ〻人戻りふいゐり亜ひの船ふて入きゝゝ傍ゐ
る酒ゐゐ女ふ立入り腰ゐ掛て沿居さゝと近ひの船来らざるゆゑ酒
店の亭主ふもひゐ生仙て以て「ホウハタン船へ戻り度ゐ」と示しけ

まゝ亭主ハ船知ゝ海岸へ立いで日の丸の旗とゐて招招くふ「ハウ
ハタン船ゐり近ひの船速ふ漕来まり爰を以て行ゐゐ手合図の能ゐき
届き居まゐふ感伏せ〻〻ゝ云ゐ十六日旅宿せ〻家ゐり少〻離まて出
火あゐ早半鐘ゐゐふて火消人足い大いふ混雑の容子ゐまゝ四辺
ふゝ家財を取片付ゐゐゐ隣家の家根ゐり婦人子ひき
連まかてゝゝゐゐ居ゐゐ火ゐ〻〻人ども手殺ゐゐゐかくの
如〻同十七日芝居の狂言を足ゐゐ世〻ふ湯ゐゐあり検査の
立回りあり不化ふ於ゝふ変りゐ〻ゐゐ子ども言古ふ世ゐゐゐば面白
ゐゐ只姿形体とゐゐゐゐゐゐ支那人の芝居も何〻〻言辞
ハ多ぜざゐゐども慈向ハ大いふ本ふの狂言ふ数ゐゐゐ面

白く光りて足わかれと移しとり又侍ハ大男のつよせものあり身の丈八尺余あり之ぞ此日も戻りハ揚船をきハより雇ひ船ハて〔ホウハタン〕へ戻ること僅三丁ばかりの所を漕りて船賃を二両一分取らせり船少し大きければ七両二分ぐらい出さねば渡さぬなり。米一升ハて三分。鮭一本ハて二両二分二朱。鶏弗十二ハて三分日本人渡来世ハ付支那人豆腐ハ製して賣る価一丁ハて三分油揚二十まいハて三分なり諸色の高直なること実ハ言語ハ絶して同十八日申の刻破船を巻て船と廻らし亜米理加民中南北の地峡るる〔ハナマの地方へ出帆せり

西洋新書初編之上終

f